雹をみて瑠璃とおもう

――仏教学との出会い――

鍵主良敬

おはようございます。此の度び新たに私どもの大谷大度仏教学会の会員になって頂くという事で、歓迎の意味を込めまして私がたまたま今年度学会の会長の任に当たっていたものですから、皆さん方にお祝いの言葉を述べる事になりました。すでに皆さん方は、その入学年度つまり昨年から、仏教学科の専門の講義を聴いていらっしゃった方たちもいますから、あらためて二回生になって初めて専門の授業を学ぶというような事ではない。しかし、インド学なり仏教学なりを仏教学科のなかで専攻する決断をされて学びの歩みを始められた。そういう点で私ももう四十年ほど前になるのですが、この大学で学び始めた頃のことを思い出しながら、皆さんが仏教学を学ぶ事に対して、何か参考になるような事を申し上げられないかと思いまして、「雹をみて瑠璃とおもう」という題にして、お話することにしました。副題は「仏教学との出会い」という事になります。

まず最初にその副題の方から申し上げるのがいいかもしれません。「仏教学との出会い」というように最終的にはしながら、私の気持ちの上では、長い間学んできました仏教学というようなものは……私にとっては出会いといえば出会いなんですけれども……面白いものであった、という事を皆さんに申し上げたい。そのような気持ちの方が最初にありました。その面白いという意味は、興味深いとか、なかなか奥深いものであるとか、内容が豊かであるとか、

そういった事も勿論あるのですが、それよりもその仏教学というものに関わってきた私自身の関わり方が、ある種の滑稽さとでもいうのか……、ちょっと我ながら顧みておかしい。まあ、今から思うと、どうかしているんじゃないか。「そんな関わり方でよく仏教学を長い間学んでこれたものだ」と申しましょうか。そういう意味合いをもっての仏教学との出会いという意味なのです。

それで皆さん方があらためて「この仏教学科の学生として仏教学なりインド学を学ぶ」となりました時に、自分の学ぶ対象にしているその仏教学というものが一体何者なのかよく解らないというような事はないでしょうか。そういう事が仮にありましたり、あるいは「どうも面白くない」「あまり本気で学ぼうとする気持ちには、なかなかなれない」というような事が仮にあったとしても、それはそれで構わない。しかしお願いしたいことは、なんとか辛抱して、「折角学ぶことになったんだから、付き合ってみようか」という気持ちを持って頂けないものだろうか。これは私の学生時代を振り返りましたときの、皆さん方に申し上げたい私からの一つのお願いになるわけです。

そういうことを何故申し上げるかということと、それから、題材にしておりますこの「雹」というのは氷の塊です。キラキラしていますし、何か一見、魅力的に見える。それに対して瑠璃は、本物の宝石です。同じくキラキラしておりましても、雹は本物の宝石ではない。そういう点で、見た目だけで騙されるな、と言ったらいいんでしょうか。そういった意味合いのことなんですが、その中身といいましょうか。どういう文脈の中で、この言葉が言われているのかという背景。あるいはまた、こういう譬えかたで我々に気付かせようとしているその事柄。その意味内容について、一応皆さん方にお話しなければならない。それと同時に、この言葉そのものに私がぶつかって……、つまり「仏教学との出会い」という副題にはいたしましたけれども、この「雹を見て瑠璃とおもう」という言葉に私が出会って、どのような紆余曲折を経てこの言葉の持っている中身とか背景とかそういったものを、私なりに多少読み取ることができるようになったか。その事について申し上げたいという思いがあるわけです。

そしてその事は、実は最初に申し上げましたように、皆さん方に「少し御苦労かもしれないが、我慢して」時間をかけて取り組んでみるに値するような、そういうものを仏教学の中から見つけてほしい。それは何でもいいのですが、皆さんが学ぼうとしている仏教学のそれぞれの分野、そしてそれはなかなか本当の宝石のように見えないといいますか……。「これは素晴らしいんじゃないか、これが面白そうじゃないか」ということでそれに飛び付いてみると、氷ですと、その氷は溶けて消えてしまいます。だから、そういう面白さというもの、最初に感じたその興味深さというようなこと、そういったものもいつのまにか実体を失って跡形もなく消え失せてしまう。だからといって本当の宝石が無いわけではない。しかし一度その雹を宝石だと思って、それを大事にしまっておいたけれども、ふたを開けてみると何もなくなっていた。そういう目に遇うと、今度は本物の宝石をみた時に、それが素晴らしい宝物なのに「また雹ではないか、消え失せてしまうんじゃないか」と思ってしまって、本物の宝石が自分の手元にあるのに、それを捨ててしまって取り損ねる。そういう事が往々にしてある。だから人間というものは、……凡夫と言っていいのかもしれませんが……本当に手に入れなければならないものを、手に入れようとしないで、どうでもいいもの、手を差し出すべきではないものに手を差し伸べてしまう。要するに「世の人、みな然り。取るべからざるを而して取り、取るべきを而して取らず」という意味合いの譬えなわけです。

ですから人生にとって、いわば我々の生きているというその事に根ざしているような、宝石のように、本当の意味で中身のある、それは一体何なのかという事。そのような意味合いの言葉。それを私は、仏教学を専門的に学び始めました頃、私の指導教授であった山田亮賢先生からある書物をお借りしました時に、その書物の中にこの言葉があったわけです。元来、人間というものは取り違いをするものだ、騙されやすいものだ……と。そうすると我々が学ぼうとしているその仏教学というものそれ自体も、光り輝くものとして見えるということは困難な意味合いもありますし、ましてその中身というものは、なかなかよく捕らえきれない。つまり少しも宝石のように見えないばかりか、雹のよ

うにさえも見えはしない。そういった状況の中で学び始めなければならない、ということもあるわけです。

そういう点から、自分が二回生の頃というんですか、皆さんと同じように、多少とも「大学において学問を学ぶというのはどういうことであろうか」というような事が問題になり始めた頃の事を思い合せながら、今の「雹を見て本物の宝石だと思ってしまう」というこの言葉との関係を申し上げたほうがいいのかもしれないと思います。

そこで皆さんは、今年度からサンスクリットなども学び始めていますし、仏教学を学ぶときには、やはり語学に対する関心が非常に大事だ、という事をまず申し上げたい。それが雹と宝石を間違う事とどう関係するのかといいますと、私は第二外国語としてフランス語を学びました。それは当時我々の仏教学を指導して下さいました方の中に、山口益という偉い先生がおられました。その先生はフランスへ留学をなさった先生で、仏教学を学ぶためにはフランス語が大事だ、というような事を先輩から聞いたものですから、そういう点でフランス語を専攻したわけです。一回生の時に文法を教えてもらいまして、二回生から、まあ、原書という程でもないんですが、フランス語のいわゆるテキスト、勿論日本語の注釈が多少付いている、それを読んだ。単位がどうしても必要で、それを取らなければ卒業できないという科目でもなかったように思うのですが。日本語でものを考えるという事は、外国語でものを考えることによって磨かれる。そういう側面を通して広がりを持つ。その面で改めて人生なら人生、人間なら人間という事について考える。そういうことで、様々な語学が仏教学を学ぶ場合には必要だという事。その点も含めまして、私はたまたまフランス語を選んで、字引を首っ引きで引きながら原書を読んだわけです。モーパッサンの『宝石』という短篇だった。名前は聞いたことがおありと思いますが。

皆さん方の中にはフランス語をとっておられる方達もおられるでしょう。語学として学びますと、どうでしょうか。フランス語ならば、"Je t'aime." とか、ドイツ語ならば "Ich liebe dich." とかですね、中国語なら〝我愛你〟とか、英語なら "I love you." です。そういうような言葉は第二外国語として学ばなくても誰でも知っていると言っ

ていいでしょう。あるいは大体自分の学んだ語学などというものは忘れてしまった。けれどもそれ位の言葉は残る、という事は言えるのではないでしょうか。私もその程度なんです。けれどもその外に、もう一言。フランス語で"Qu'avez-vous de l'argen?"というフランス語が耳に止まったのです。既にもう四十年近くになるのですが、私がこの大学で学んで、仏教学を学ぶためにはフランス語が大事だという、その事の成果というのは、今申し上げたこのフランス語だけというようなはなはだお粗末極まりない、それしか残すことはできなかったわけです。しかし逆に言いますと、この一言というのは、私は生涯忘れないだろう。この一句だけは忘れようとしても忘れられないように思います。

そこで、どういう意味かというと、英語で言えば"How much is this?"ですかね。「おいくらですか」というか、「いくらになりますか」というようなフランス語なんです。モーパッサンの短篇の中にその言葉が何度か出てきた。どういう場面で出てきたかと申しますと、この小説は皆さん、あるいは読まれた方があるかもしれません。

そこに貧乏ったらしいというのか、甲斐性無しと思われるような役所務めのサラリーマンがおりまして、そのサラリーマンが大変美しくて優しい貞淑そうな奥さんをもらった。で、その奥さんの趣味は安物の装身具を集めることと芝居見物でした。まあ、旦那が大変甲斐性無しなものですから、旦那の給料だけで食べていくのは大変でしたが、時には芝居見物に出掛ける。ただし旦那の帰宅する頃には必ず家に居て、サービスに努める。なけなしのお小遣いで「私、こんな首飾りを買ったのよ」、あるいは「指輪を買ったのよ」と言う。まあ、キラキラはしてるんですが、たかがわずかのお小遣いで買える程度のものですから、おそらくガラスか何かであろうと思われる、そういう宝石を旦那に見せていた。旦那は「そんな安物の宝石なんか買って喜んでいて愚かな女だ」と奥さんを見ていたらしい。

ところがある時、奥さんが芝居見物に行って風邪をひき、それをこじらせて急性肺炎か何かになって急死してしまった。素晴らしい奥さんを急に亡くしてしまったものですから、旦那の悲歎は大変で、わずかの間に髪の毛が真白に

なるほどで、そのままにしてある奥さんの部屋に閉じ籠って、想い出にふけっていた。それにしても、とにかく生活が苦しい。たちまちのうちに食いっぱぐれてしまって、明日の糧にも困るようになった。そこで、食物を買うお金も無くなったために、奥さんが形見に遺してくれた、ガラス細工であろうと思われる安物の宝石を宝石商のところへ持っていって、それを売ってせめてパンの一切れくらいでも買えないだろうかという事で、"Qu'avez-vous de l'argen?"とですね。「いくらになりますか」「いくらで引き取ってくれますか」というように店の主人に尋ねる。そうすると、その親父が今の貨幣価値でいえば「それならば何十万か何百万でいただきましょう」と申し出た。それでその男はびっくり仰天して「この店の親父はおかしいのじゃないか」と思って、その店を飛び出して別の店へ行って、もう一度「いくらになりますか」「いくらで引き取ってくれますか」というように訊ねる。ところがどの宝石商も皆、「何十万か何百万円で買う」と言う。そこで折角そう言ってくれるんですから、一つ宝石を売って食いつなぐ。ただのガラス玉で、たかが今で言えば千円にもなるかならないか、というようなつもりの物が、何十万、何百万という本物の宝石であったという事です。そしてまた、次の指輪だとか首飾りだとかをその店へ持っていくと、すべて本物であった、というんです。

この小説を原書で読んだから、という事もあるのでしょうが、たかがわずかの小遣いをためて手に入れたはずの、おそらくガラス細工であろうと思われるような、そういう宝石がすべて本物であった。一体これはどういうことなんだろう。文学部の学生として、仏教学を本気で学ぶとかいうような決心もまだ十分にできておらず、自分が対象にしている、その仏教学というものが何ものであるかということもよく解っていなかった頃でしたので、仏教学に先立って文学部の学生として、文学とは何なのか、何を言おうとしているのか。そういったことがそもそも問題になったといえるかもしれません。また、この安物がいくらになるか、どれだけの価値があるかを問う、その言葉が印象に残ったということは、恐らく無意識のうちに、どんなにつまらなく見えてもこの人生は生きるに値するといえるような、

何か確かなものを問いたださずにいられなかったのであろうかと、今にして思い返していることです。と同時に、今申し上げているところと関連させて考えてみますと、仏教学とそれを学ぼうとしている私とが、どうもそこに本物と贋物との取り違えが生じて一致しない。今のモーパッサンの『宝石』で言えば、みんな贋物に思えてしまっている、というんでしょうか。どこにも本物などはないというように、仏教学というものが全部贋物にしか見えない。そういう状況の中では、仏教そのものがガラス玉のようにしか見えないことになる。

そのような時でも大学で学んでいるというだけで、人間にとっての大きな深い人生そのものの課題に出会うことはありうることですが、その中の一つに男と女の問題があった。そしてまた、ささやかな小遣いごときで買い集めたものが、すべて本物の宝石であったという。どうしてそうなったんだろう。まあ、甚だ悔しいけれどもどうしても解らなかった。翻訳をもし読んだとすれば、直ちに解ったのかもしれませんが、原書を読んだ者が翻訳されたものを読んでその意味を理解できなければならないというのはあまりにも情けない、というような気持ちがあったのかもしれません。「どうしてなのか。どうして本物になったのか」と、その事を考え続けた。皆さんに、辛抱が大事だ、一つの問題を抱えて取り組んでくださるという、その心構えが大事だと申し上げたのは、私にとっては大問題ではあっても、甚だ滑稽ともいえるようなそのような事があったからです。そして「宝石がどうして本物だったんだろう」という事が念頭を離れないようになって、十年程してでしょうか。それは自分が結婚してからであったかもしれませんが、ある時その答えにふと気付いて「ああ、そうだったのか」と納得できた。

勿論、今私が申し上げている、ガラス玉のはずのものが本物であるためには、どうすればそういう事が可能になるか。その理由については、皆さん方は既にもうお気付きかもしれませんし、その答えを私は言うべきではないのでしょう。しかしいかにすればガラス玉のふりをしながら、本物の宝石を楽しむことができるか。またはそのことのもっている深い意味と方法を、これから永年かかって考えて頂いていいかもしれません。

ただしモーパッサンがいいたいのは、優しくて誠実そうに見えていた女の人の恐ろしさとか、信頼できるように見えていたものに実際は裏切られることがあるということであるとしても、私は贋物にみえるような本物となってでも、本物であることを証明したいというところに、本物が本当に本物であることの意味があると解釈できるかもしれない。あるいはほとんど価値のない安物のように見えながら、実は高価な本物を我々はどれほど見逃しているか。その点に気付く必要があると思ったりしています。

ともあれここで私が改めて言わなければならない事は、モーパッサンが鋭い洞察力をもって我々に皮肉たっぷりに教えてくれている、人生の機微というようなものについて考えあぐねておりました時に、先ほど申し上げました私の先生が読むように勧めてくれた書物のことの方なのです。その書物というのは『秀存語録』で、実は佐々木月樵の撰とある。佐々木先生はこの大学の第三代目の学長をお勤めになった方で、大谷大学の成り立ちの基本を示すものとして最も大事な「樹立の精神」を、我々に遺して下さった方です。七・八十年ぐらい前に学長を勤めていらっしゃった。その佐々木月樵先生が私淑していたのが、今から一五〇年程前の方ですけれども一蓮院秀存という仏教学者でした。

皆さんお聞きになったことがあるかもしれませんが、この大谷大学は三二〇年ほどの歴史を持っている大学ですが、文部省令による文学部の単科大学としての歩みは、佐々木月樵先生の頃に始まる。けれども、その背景としては三〇〇年以上の歴史がある。そういう点から見ますと、今から一五〇年くらい前にこの大学の教授職にあたるような役目を勤められた一蓮院秀存という方は、仏教学特に私が専攻しております華厳学という、その学問の方で名前も通っておりまして、『華厳五教章』だとか、『大乗起信論義記』だとか、そういったものの講義が大変中身の濃い有名な書物として残されている方なのです。

それと同時に、ひとりの人間として生きているというのか、何を拠り所として我々はこの人生を生きぬいて、どのように物事を受けとめてそれに対処していけばいいのか。我々にとって非常に困り果てる問題というのか、虚しく生

きるというようなそういう索漠とした人生じゃなしに、そこに光り輝くものを見いだす。そしてその人生の光となるようなそのものは、決してただ見た目だけでキラキラ輝いているというものではなく、実質的な中身を持っている。そしてその中身そのものが、一応、対象になる。仏教を学ぶといいますと、それは対象になります。しかしただ単に外側にあるのじゃなしに、それを求めているというか。そのことを知りたいと念願した、そういう人生そのものの本当の意味での充実感というようなもの。それを明らかにするための仏教学です。というと少し問題があるのかも知れませんが。仏教学そのものが単なる対象ではなしに、学んでいる我々自身と一つになってくる。そのような仏教学を学ぶことによって、我々の人生そのものも豊かに内容付けされる。そしてまた私のように、たまたまのことで偶然のようにして仏教を学んだのだけれども、あるいは甚だ滑稽千万な関わり方で宝物といいましょうか、その宝石といわれるものとも出会わざるを得ないこともあるのだけれども、そこには思いもかけない深い背景があってのことなのだという、そういう二面性を持った大乗としての仏教学を学んでおられた方。それが一蓮院秀存という方です。そしてまたその人の言葉あるいはその座右のメモ、それを佐々木月樵先生が、書物の形にして残して下さっていた。その書物の中に、今申上げました「雹を見て瑠璃とおもう」という、こういう言葉が記されているのです。

しかもです。その方は、一蓮院秀存という華厳学の大家ということなんですが、華厳に関わる言葉としては、この言葉だけを、どうも座右の銘にしておられたらしい。大変な学者ですから、色々なことを『華厳経』という経典またはそれに関する論書の中で御存じのはずですし、それに関連する様々な参考書といわれるものも充分に学んでおられる方なんです。が、日頃傍らに置いて己れを鞭打っておられたとでも言っていいんでしょうか。なかなか本物と贋物とを見分ける事は難しくて、ついつい贋物に手を出してしまう。そしてそのためにひどい目に遭う。そうすると今度は本物があるのにそのことを見失ってしまう可能性があるというような座右の銘。だから、本当の宝石、それを手に入れようと思うなら、絶えず本物に心を掛けなければならないだろうという、そのような意味合いでこの言葉を残し

て下さったと思うのです。

ところが、というのか。昔の学者というのは呑気であったと、こう言っていいのかもしれませんが、その言葉を佐々木月樵先生は、『華厳経論』という書物にこの言葉があると記録されている。それは一蓮院秀存がそのようにメモしていたからそうなんでしょうが。そしてそれと同時に八十巻の新訳の『華厳経』の注釈書であります『大疏鈔』、九十巻ほどの膨大なものですが、それの巻の「十九にも之を引けり」というように記録してくれている。それでその『華厳経論』といっても、これも大きな書物なんですが、それをチラチラとめくってみたけれども解らない。また『大疏鈔』の巻の十九巻くらいですと、分量はそんなに沢山ありませんから、「どこにあるのだろう」と思って探してみました。最初に申し上げましたように、「どういう文脈の中でこの言葉が言われているのだろう」ということが気になったからです。ところが全然無い。そうすると九十巻ほどある書物の中で、その場所が明らかでないわけですからもう探しようがない、という事です。これもまた、モーパッサンの『宝石』じゃないですが、「どこにある言葉なんだろう、どういう背景のもとで言われたんだろう」という事で、この言葉のある場所を見つけましたのも、これもまた二〇年かかったと、申し上げたら宜しいかもしれません。

たまたまだったのですが、しかしたまたまという事は、念頭を離れずに気になって仕方が無いというような、そういった思いに駆られて諦めきれない、と言ったらいいんでしょうか。そうしますと案外、願いというものは叶うものだ。本当の意味で人生そのものを充実させたいという、そういった願い。そしてまたその場合に、それを満たしてくれるはずの宝石のように光り輝いている物。それはまるで贋物にしか見えないというような、そういう関わり方の中で、しかし何かそこに、ほんのわずかであっても本物がある。その本物に対する直感がはたらく。つまり、我々自身はまだ専門に学び始めた点では、ほんの僅かの関わり方しかできていないはずですが、しかしそういったほんの僅かのところででも、我々は既に自分自身のかけがえのない人生というものを充分に生きているといえる。そこで自分の

生命そのものを全うする以外に方法が無い。そのようなかけがえの無さ、というものを既に持っている大学生である、といいましょうか。あるいは文学部の学生である。

そういう点で思いますと、私たちが学ぼうとしている、その仏教学そのものと我々との関わり方というものは、たとえどのような関わり方であってもよろしい。それはそれとして、何か皆さんがたまたま選んで下さったその学びの場所には、確かに宝石がある。そしてその宝石は、我々の人生を必ず満たしてくれる。そういうものがある。ただし、それを手に入れる。あるいは出会っていく。宝石との出会い。宝石のように光り輝く仏教学との出会いが大事である。そしてその事に対して思いもかけない奥深さ、背景のようなものを感じ取ることの大切さです。

本物を贋物だと思い、あるいはまた贋物を本物だと思い違いをして、貴重なチャンスを与えられているのに、それを虚しく逃がしてしまったり、「どうしてあんな回り道をしてしまったんだろう」という、後悔の念に苛まれたりすることもある。しかし、様々な紆余曲折を経ながらも、それでも何か本物への憧れを捨てきれない。そのような一人の人間に対して、その人間そのものを満たしてくれる、そういった光り輝くものを求めて華を開かせてきた、そういう歴史の流れとして仏教学二五〇〇年の歴史というものが確かにある。大谷大学としては三二〇年といわれますが、それはもっともっと深い。そういう背景を持って仏教学というものが成り立っている。そして佐々木月樵とか一蓮院秀存とか、日本の仏教学者ばかりでなしに、インド・中国の仏教学者。本当の意味での人生そのものを課題としながらも、仏教の学というものに自らの人生を捧げてきた、龍樹菩薩とか世親菩薩。そういった方たち。天台大師・賢首大師、その他様々な歴史を彩ってくれた先輩方の、血と汗の結晶のような、そういう宝石。それを我々は、私の手で握り締めよう、というような……。そのような志の下で、仏教学を学び始めようとしているのではないか。

そこで、今、こういった譬えについて考えてみても、よく解らないんですが。解らないということは、私は賢首法蔵という人の華厳教学を専門に学んでいるものですから、それだけで手一杯で。また、その人の、我々に教えようと

している宝石の輝きというものも、なかなかよく解らない、というような点もあるんです。けれども、その法蔵の次に華厳学を大成しました澄観という人がおります。その人の著書の中にこの「雹を見て瑠璃だとおもう」という言葉が引用されておりまして、それを何十年もかかってやっと見つけたわけです。ところがこの言葉は『荘厳経論』にある、というようになっております。ですから『華厳経論』ではない。それを一蓮院秀存は『華厳経論』というように思っていた、というんでしょうか。これは贋物と言っていいのかどうか。錯覚だったと思うんです。

しかも『荘厳経論』といいますと、『大乗荘厳経論』のはずですが、現存の『荘厳経論』には、こんな洒落た言い方……と言うと、ちょっと『荘厳経論』を学んでおられる先生方に申し訳ないんですが、こんな言葉はありそうにもない。もしあったとしたらお教え頂きたいんです。そして巻数も『大疏鈔』の十九巻ではない。四十二巻にある言葉で十九巻にはない。それを十九巻などと……。まあ、いい加減な、と申しましょうか。そういう巻数をメモに残されたというのはどういう事なんだろう、と。また、よくよく案じ見れば、と言いましょうか。「どうしてそういう間違いが生じたのか」と思って確かめてみますと、それは新訳の『華厳経』の十九巻、巻第十九にある、その経文に対する注釈でした。それを『華厳大疏鈔』の四十二巻において注釈する時に、この言葉が述べられている。という事になりまして、まんざらデタラメとも言えない。しかしこの巻数を、まさか「元の経典の巻数である」などという事は、思いもかけない事ですから、それを確かめていきますと、「なるほど、そういう間違いも生ずるのか」という事で、間違うことにも色々深い意味がある事も解ってきまして面白いんです。

そういった点も含めて、その言おうとする意味を確かめていきますと、これは『華厳経』に対する注釈ですけれども、その背景になっている所には『涅槃経』がある。大変これも有名な経典ですし、皆さん方も学ぶチャンスがあると思いますが、その中に「春池の喩」といわれるものがある。つまり池に舟で漕ぎだしました時に、女官でしょうか。女の人が、たまたま首飾りをしていて、その首飾りの紐が切れて宝石を水の中に落としてしまった。そこで慌てふた

めいて、お付きの者でしょうか。それが水に飛び込んでこの宝石を探して、水中でキラキラ輝いているからというので、いわゆる石とか瓦というような物を、「これがその宝石であろう」と思って握り締めて上がってきまして、よくよく見るとただの石瓦に過ぎなかった、というんです。この譬えで仏陀が我々に教えようとしている本物。本当の私でもいいですし、決して変わることのないような、確かな人生そのものを支えている豊かな内容。あるいは健康そのものというような……。何かこう、病的な歪みを持った暗いジメジメした、そういった仏教ではない。まあ、大乗仏教そのものでもいいんです。あるいは『涅槃経』ならば、人生そのものが完全燃焼して、全く何等の未練もなしに、そこに充分に中身を育む事のできるような……。そういう教えを聞くときに、贋物と思い違いをする。そういった言い方もされている。だから、その言葉尻に捉われずに、その言葉の持っている本当の意味を求める必要がある。間違うこともあるから、その間違いを手掛かりにしながら、しかし本当の物を探り出しなさい、というような事を述べております。その『涅槃経』を背景にして、澄観という人は、どうもこの「雹を見て瑠璃と思い込んでしまう」という言葉を残しているようです。

それと同時に、経典そのものが言おうとしているのは、我々がまだ、僅かに専門に学び始めたばかりではあるけれども、しかしそこに決して遠慮する事のないような……。ほんの僅かであっても、しかし、そのささやかな所で既に、本物に対してある種の、何かこう感じ取る事のできるような、本物に対して反応する事のできるような、そういったものの知り方を与えられているはずだ。それが智慧だ、と。いわゆる知識ではない。外側から我々に与えられるものではなしに、我々の、生きているというそのことの中から、何かを感じ取らせてくるもの。教えてくれるもの。本物に対する憧れを与えてくれるもの。それは仏教そのものが、あるいは仏陀御自身がその生涯をかけて我々に教えようとしてくれている、人間そのものの持っている……我々自身の、と言っていいでしょうか……「唯我独尊」と言われるような、その「我」。大いなる我。自分自身。そのような私自身として我々が仏教学を学ぶ事によって、一応、仏

教学は対象化はされておりますけれども、その仏教学と出会っている。あるいはその仏教学の中から、自分自身の人生そのものを輝かせたいと念願せざるを得ない。そのような仏教学として、それを感じ取る事のできるような能力。それは充分に与えられているはずであります。だから、そういう自分に対する自負心は捨てないで頂きたい。しかしそのことは、私は何十年もかかって、やっと「なんだ、こんな所にあるのか」とか、「なあんだ、そんな事だったのか」とか。「そんなことで、我ながら笑止千万」と思わざるを得ないような関わり方の中で気付いたことであります。しかし、その背景になっているものそれ自体は大変奥深さがあった。

そして最後に、締め括りとして申し上げておきますが、その智慧というもの。本当に物事を解ろうとするならば、ものを解ろうとするその時に、解ろうとしなければいけないけれども、その、解ろうとする、その事に捉われてはいけない。本物を見ないといけない、本物を見つけ出さないといけない。しかし本物を本当に見つけようと思ったならば、本物を見つけるという事を……超えないといけない。「見るところを見るべからず」と、この譬えの元になっている経文では智慧を象徴する智林菩薩が言うのです。聞こうとしないといけない。本当の事を聞こうとしないといけない。けれども、その聞かなければならないものを……聞こうとしてはいけない、と言うんです。まあ、捉われるな、という意味よりは、もっと深い内容があると思うのですが、何事に付けても、その手掛かりになるものを手掛かりにしながら、その事を乗り越えて行くような……。ですからそういう点から見ますと、失敗するとか間違うとか、そういった事は往々にしてあるわけですが、その事が乗り越えられれば失敗はただの失敗ではなくなります。回り道もただの回り道ではなくなる。そのような意味合いをも含めて考えてみると、我々は、本当に掴まなければならないものを掴み損なって、掴む必要のないものに捉われて、あらぬ方向へ流されてしまっている。そして貴重なチャンスを与えられていながら、自分の人生そのものを虚しく空費してしまっているのではないか。

そのような現実の中で本物を学ぶ。光り輝くものを手に入れる。その事が、仏教学を学ぶことの意味合いであって、

皆さん方は、そういう仏教学をこれから本格的に学ぼうとしておられるのであろう。その点で、どうぞ自分の学びの姿勢というもの、それを願わくば振り返り振り返り、本物なのか、贋物なのか。贋物だと思って馬鹿にしていると、それが案外、本物として我々を助けてくれる、豊かに満たしてくれるという事もある。あるいはその逆の場合もある。そのような様々な紆余曲折の中で、本当の意味での仏教学の学びというものに加わって頂けたなら大変嬉しいことであると思うことであります。そういった意味合いにおいて、皆さん方を、歓迎させて頂きたいということで、私の皆さんをお迎えする歓迎の言葉とさせて頂きます。